

第二回ソーシャルアート café アンケート (2015年7月10日)

内容：

- 1, 「芸術と社会の関係」 知足美加子 (sal)
- 2, 「地域と創造」 小野寺睦 (旅をする木)、大松康 (清か農園)、浦田剛大 (スタジオターン)
- 3, 「ソーシャルアート。目的か手段か」 (芸術情報 3年生：梅野、宇野、中雄、森)

(参加者 16 人… 主催者、発表者除く)

* 予定していた講師の河合勇作先生 (沖縄県立芸術大学, OCAC) は、沖縄に台風が直撃したため、お招きすることができませんでした。

【問：ソーシャルアートとは？】

- これまでソーシャルアートとは社会問題を解決していくことと思っていたが、自分が望むこと、好きなことを創造的に行うことで自然と社会がかわることを指すのかもしれないと思った。(20代男性)
- アートが中心になることで、多くの人が関わることができると思った。それは即効性があるものでなく、広くゆっくりしたもの。アートというより、生き様のような。(20代女性)
- アートが媒介になって、人と人をつなげることだと思う。特に、マイノリティーの立場の人を巻き込み、ネガティブな表象を変えていく活動。アートプロジェクトの中心に、学生運動に関わっていた方が多い。表にはでてこないが、彼らにとってはマネージメントというより、社会革命的な意味合いが強いかもしれない。(30代男性)
- 地域に関わっていく創造活動。(20代女性)
- 昨日のお話や、最近の私の研究活動の流れの中で感じることも加えると、
 - ・ 社会の特徴や課題を表現する
 - ・ ステークホルダーを繋ぐ
 - ・ 未来に託すあたりが、じっくりくるような気がしております。表現は、社会の課題だけでなく特徴もあってよいでしょうし、影響範囲も広くなく、その社会に関する関与者の範囲でも良いような気がします。今後の研究活動を考えると、当面のプロジェクトについて、考え方の範囲をある程度共有し、より、具体化したほうがよいように思いました。
昨日の3名のお話についても、概ね、上の3点が共通事項のような気がしており、アーティストというよりは、地域の実践者、地域の方々のベクトルとしてみると、理解の得られやすく、また、研究者やアーティストとの共同に際しても、この程度であれば、無理がないと思います。(sal 教員)
- アートが地域に密着した時何か起きる？ 社会を変える意志システム (20代男性)
- 今回の芸プロを通じて色々な考え方があることを知り、私の中でまだぐるぐるしている状況です。しかし、人と芸術の関係性というのが全てにみえる気がします。(20代女性)
- 問題提起 どれだけ問題について人に考えさせられるか。(20代男性)

- アートは、社会との関わりを前提にしたものではなく、自分の作品から社会へと関わりを作れるもの（あるいは“社会”ということを廃し、自己との対話のみを目的としたもの）であった。必ずしも、すべてのアートに“ソーシャル性”があるわけではない。ソーシャルアートに適したアートの形があるのでは、と考えました。
（作り手側として、作品と対峙する心の違いがあるのではないかと）社会を変えるために作られたアートがソーシャルアートなのか、芸術作品として独立し、かつ社会を変える力がある作品を生み出す事がソーシャルアートなのか 地域や社会との関わりとなると“自分の表現”が押さえられるのではないかと？社会があって芸術と関わるのか、芸術が社会へと力を加えていくのか。定義はまだ分かりません。(20代女性)

【感想】

- これからの僕たちについて、アートをきっかけに深く考えさせられる刺激と示唆に満ちた会でした。それに出席できたことが嬉しくてたまりません。携わっていただいた皆さまに改めて心から感謝します。
昨日の会で特に心に残ったことがいくつかありました。一つは、ヨーゼフ・ボイスの自由国際大学で行った、7000本の檜の木植樹計画とそれによって現在の緑の党が出来ていったこと。三瀬村で林業の手伝い（本業だった炭焼きも含めて）を

してきた身として、木を植えるということの社会への意味とインパクトをもう一度思い直さねばと思いました。また、阿波根さんの運動・哲学・姿勢と金城実さんの芸術家の責任についてお聞きし、いまの日本の僕らがまず忘れてはいけないこと、もう一度ちゃんと過去を見つめ直し、自分なりに総括してからこそ、未来を作っていくことができるのではないとも思いました。ゲストの大松さんから、三の森学舎のことを、建学の理念やその具体的な活動・授業などどのように作り上げているのかなど、今度はもっとくわしくお聞きしたいですし、浦田さんからは、どのようなビジョンを内に持たれて、あのような日々の素敵な活動をされているのか、やはり現場でお聞きできる日がいつかあればと思っています。いずれにしても、九州大学の先生方・学生の皆さまをはじめ、これから生きる上でこんなに頼もしく心ワクワクさせてくれる方々と出会えたことにただただ感謝です。(ゲスト登壇者)

- ソーシャルアートは社会のシステム自体に関わる基盤をつくる、人と人をつなぐ、社会をかえる手段であるとお話がありました。しかし、そのようなことは例えばイオンがもっとうまく決定的にやっているのではないかと。イオンが1つ出来るのと町の動線も、人の生活もかわります。現にある資本主義社会の補完物にしかない”アート”の存在価値とは何だろう、と思いました(20代女性)

第二回ソーシャルアート café アンケート (2015年7月10日)

- 社会と芸術をつなげる、という話だったと思いますが、お話を聞いていて、あまりに「政治的に正し」すぎる、あまりにお行儀がよすぎるのではないかと感じました。ソーシャルアート、コミュニティアート、参加型アート…これらは芸術家と社会（市民）の共同・協働によって作品を制作、あるいは芸術行為として行われるのだと思いますが、そこで「社会」や「市民」として想定されている他者が芸術家にとって都合のいい他者でしかないのではないかと、それは他者なのでしょうか、自己の延長でしかないのでは。(20代男性)
- 社会も芸術も人がやることで人が作るもので、両方人が動くことでなにかがおきる。(20代女性)
- 日本ではアートが生活から切り離されていることで文化が育たない・衰退しているのではないかと…。浦田さんの「芸術は自己肯定のツール」という考え方が非常にしっくりきた。(20代男性)
- 今回、田舎や自然に関わりを持っている人が多く、新しい技術や都会での生活とは離れた”ソーシャルアート”については、どのような関わりがあるか分かりましたが、こういった活動以外の方向性の違う“ソーシャルアート”の形はないのでしょうか？アーティストとして作品（自分の自己表現の為）を生み出す事を中心にしながら、社会と関わる例がないのか気になりました。まだ“定義”がわからず、地域の関わりを求めて活動する事が“アート”という形態を持つのか、と疑問を持ちました。(20代女性)